



医学・看護学教育通信

第 15 号

発行 2008.12.1

Medical and Nursing Education News

UH JABSOM Regional FD Workshop in Saga が 開催されました

去る 11 月 14～16 日、本学において、ハワイ大学医学部 John A. Burns School of Medicine との共催で医学教育ワークショップを開催しました。ハワイ大学より医学教育室長 Dr. Richard T. Kasuya、副室長 Dr. Damon Sakai、JABSOM の PBL カリキュラム卒業生であり教員として活発に活動している Dr. Ivy Nip を招聘し、本学の小田を加え合わせて 4 名が taskforce を務め、学内外からの 50 名の参加者（教員、学生）とともに、活発な議論の場を持つことができました。

教員は「Effectively Utilizing PBL in Medical Student Education」を議題として、PBL についてさまざまな角度からの議論を行いました。PBL は、症例シナリオを用いた少人数グループ討論（テュートリアル）をトリガーとした自己主導型学習として実施されますが、その成功のためには、学生を動機づけ、学習を導くチューターの技量やシナリオの充実とともに、自己学習を支援するリソースの整備、講義や評価の設定など、一貫した教育設計が必要です。また、PBL における思考法・教育技法が効果的な臨床実習に極めて有効であることを示すことが、実習前教育課程の学生を動機づけることにもなります。このような PBL の全体像が明らかになったワークショップでした。

学生は「Being a great PBL student」をテーマとして、PBL の各 Step から学ぶ方法およびチューターをするための基本的なスキルを学び、症例シナリオを用いてそれらを実践しました。PBL の目的は正しい診断に辿り着くことではなく、随所で“learning opportunity”を見つけることです。そのためには、学生が主体的に各 Step・Sub step で十分に討論し、チューターが様々な手法を用いながら討論を引き出し、能動的学習へ導く必要があります。今回は学生自らがチューターを体験することにより、PBL を最大限に活かすための学生およびチューターの役割が明確にされたワークショップでした。（小田康友）

研修医による市民講座の紹介

卒後臨床研修センターでは、初期研修医のコミュニケーション・スキルを向上させる目的で、9 月より「研修医による市民講座」を始めました。研修医がよくある病気などについて講演を行い、参加して頂いた方に、研修医の話し方・聞き方などについて評価をして頂きます。また、「自由討論」と題し、たとえば、「かぜをひいたら、病院に行った方が良いのかどうか？」というような身近な話題から、複数の研修医と市民とが討論を進めながら、医師と患者の考えのギャップを埋めていくコミュニケーションの時間を設けております。

研修医が、一般の人に、医学的知識をわかりやすく伝え、疑問に丁寧に答えるトレーニングをすることで、コミュニケーション能力が上達すると考えて始めた講座ですが、双方向のコミュニケーションをとることにより、医師と住民との間に良い関係を築くことができ、医師を地域全体で育てる雰囲気が出来上がることで、医師の地域へ貢献のモチベーションがあがるといったような効果も期待されると考えられます。

現在は、主に、卒前教育の模擬患者グループ“のぞみ”の方に、評価して頂いておりますが、徐々に、協力して頂く市民の方を増やしていきたいと考えております。

（江村正）

教育広報部会

小田康友、池田豊子、市場正良、吉田和代、
江村正、藤田君支、田崎法人

ご意見をお待ちしています (oday@cc.saga-u.ac.jp)

